



Title	はしがき 内陸アジア言語の研究 XXXI
Author(s)	
Citation	内陸アジア言語の研究. 2016, 31
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/58628
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

はしがき

1984 年に神戸市外国语大学で創刊された本誌は、内陸アジア～中央ユーラシア地域発現の諸種の言語資料を言語学・文献学・歴史学的な視点から、あるいはディシプリン横断的な視点から考究した論文を、紙数に制限を設げず学界に提供するという方針を採用してきた。この方針は幸いにも国内外の研究者の支持を得ることができ、本誌は、1993 年の発行母体の変更をはさみつつも、昨年に至るまで合計 30 号を刊行してきた。

ところで、21 世紀に入って、学術的研究成果の発信手段としてのインターネット環境の整備が急速に進展している。本誌も、2009 年以降、刊行後 3 年を経過した所収論文については、その PDF データを大阪大学学術情報庫 OUKA (Osaka University Knowledge Archive, URL: <http://ir.library.osaka-u.ac.jp/portal/>) に掲載し、研究成果を広範に発信することに努めてきた。しかし、世界各国の内陸アジア～中央ユーラシア学研究は日進月歩で展開・発信されている一方、海外の研究者・研究機関にとって、本誌の最新号を迅速に入手することは、経済的・物理的にもなお容易ではない。

そこで本号からは、冊子体刊行と同時に、上記の大阪大学学術情報庫 OUKA にも PDF データを掲載することとした。これはすなわち、本誌の最新の掲載内容が、刊行後ただちにかつ無償で、定期購読者だけでなく全世界の読者にもアクセス可能となることを意味する。また、紙面の効率的利用という観点から、判型も拡大して B5 判に変更することとした。

このように、学術雑誌を刊行と同時にネットで無償公開することが、雑誌の運営・継続にとって最善であるか否か、我々にもなお確信はない。しかし、国際的水準で最先端の研究成果を刊行することで、斯学の発展に貢献するという本誌の理念には些かの変更もない。それらの成果を迅速に、またよりオープンな形で全世界に発信することは、最終的には、本誌そのものの存在意義を高めることになるものと信じる。

読者各位には、本誌の新たな試みに込められた微志を諒とされ、倍旧のご支援を下さるよう謹んでお願い申し上げるものである。

2016 年 10 月

中央ユーラシア学研究会

『内陸アジア言語の研究』編集部